

7) 顎口腔領域の蜂窩織炎についての臨床統計学検討

○林 昭宏, 浜田 智弘, 小板橋 勉, 金 秀樹
中江 次郎, 高田 訓, 大野 敬
(奥羽大・歯・口腔外科)

顎口腔領域の蜂窩織炎は急速に拡大進展し重篤な症状を呈する。また日常臨床において比較的遭遇することが多い疾患である。しかし、その原因や治療についての臨床統計学的検討はあまり報告されていない。そこで今回われわれは2000年4月から2005年3月までの5年間に、当科で治療を行った顎口腔領域の蜂窩織炎368例について検討した。

平均年齢は39.2歳で30歳代が最も多く、男女比はおおよそ3:2で、やや男性に多かった。原因疾患のほとんどは歯原性疾患であり、特に根尖性歯周炎が多く、次いで辺縁性歯周炎、智歯周囲炎が多かった。原因歯は、上顎では第二小臼歯および第一大臼歯、下顎では智歯が多かった。蜂窩織炎の発症と季節の間には関連は認められなかった。消炎方法について検討したところ、抗菌剤のみで消炎したものと、抗菌剤と口腔内消炎術を併用したものが多く、口腔外消炎術はごく少数の重篤な症例にのみ適応されていた。そこで抗菌剤のみで消炎したものと口腔内消炎術を併用したものとで消炎期間に差があるかを検討した。その結果CRP6mg/dl未満の症例についてもCRP6mg/dl以上の症例についても、その消炎期間に有意な差は認められなかった。臨床症状を改善させるために消炎術の施行が必要不可欠である場合は少なくない。しかし今回の結果より消炎術は消炎期間の短縮には寄与しない可能性が示唆された。

8) 梅毒検査の偽陽性に関する検討

○菅野 勝也, 浜田 智弘, 小板橋 勉, 金 秀樹
高田 訓, 大野 敬, 柴田由美子¹, 矢吹 恵子¹
(奥羽大・歯・口腔外科, 奥羽大・歯・附属病院)

梅毒の血清学的検査は妊婦や手術前の患者に欠かせないものとなっており、当科でも全入院患者に対し施行している。しかし梅毒の血清学的検査には、5~20%に偽陽性がみられるともいわれており、判定が困難な場合も少なくない。また歯周

病などの歯科疾患によっても偽陽性が引き起こされ、判定に歯科での所見が重要になると考えられる。今回われわれは当科入院患者における梅毒偽陽性症例について検討したので報告した。

当科において梅毒の血清学的検査にはSTS法 (Serologic Test for Syphilis) としてRPR法 (Rapid Plasma Regain test) とガラス板法、TP法 (Treponema pallidum test) としてTPHA法 (Treponema Pallidum Hemagglutination test) の計3法を用いている。2003年4月から2005年3月までの2年間で検体総数は706例ありうち陽性が2例、偽陰性を示した症例が1例、偽陽性を示した症例は7例であった。偽陽性7例に関してSTS法の偽陽性は4例、TP法の偽陽性は3例であった。

STS法の偽陽性では老年による生物学的偽陽性と考えられるものが2例、麻疹等のウイルス感染による生物学的偽陽性と考えられるものが1例、C型肝炎や肝癌による生物学的偽陽性と考えられるものが1例であった。TP法の偽陽性は、口腔領域の感染症 (歯周疾患, 蜂窩織炎) によって *Treponema pallidum* 以外の *Treponema* 属の感染がおきた可能性が高いと考えられた。

9) 医療不信を伴った極度の歯科恐怖症患者の歯科治療経験

○清野 浩昭, 関 康宏, 川合 宏仁
山崎 信也, 大野 敬, 佐藤 穂子¹
(奥羽大・歯・口腔外科, 歯科保存¹)

(緒言) 歯科恐怖症とは、歯科治療に対する恐怖心から、循環変動、ふるえ、体のこわばり、嘔吐反射などの種々の症状を惹起し、通常の歯科診療が受けられない状態で、医療恐怖症の範疇である。過去の診療における疼痛や苦痛の体験が原因となっている事が多く、しばしば医療不信を伴う。今回、われわれは、歯科治療に非常に難渋した医療不信を伴う極度の歯科恐怖症患者の歯科治療を経験したので、その概要を報告する。

(症例) 20歳女性。左上奥歯が痛いという主訴で来院。

(経過) 初診時は恐怖心が強く初診科にも入れない状態であった。問診により、12歳まで近歯